

仮名

中務集

〔重要文化財〕

伝西行 平安時代・十二世紀

教科書 45ページ 出光美術館蔵

読み

きじのこゑ^惠
 はるがすみあさたつのべにたつ^多
 きじのしのばぬねにや人^八
 のしるらん

『中務集』 36)

ちかき山ざくら^{可支}
 わがやど、はるの山べのつまなれば^八
 ほかのはなとも おもほえぬかな^{可奈}

『中務集』 37)

四月みあれひく^久
 きみをだにいのりおきては^多
 うちむれてたちかへりなんか^无
 ものかはなみ^{可奈}

『中務集』 38)

歌の意味

朝、春がすみ立ちのぼる野原から飛び立つ
 きじが人目を気にせず声を上っているよう
 に、私の人目を気にしないこの泣き声で、
 (私の辛さを)人は知ってしまうのでしょうか。

私の家というのは、春になると桜が咲く山の
 端にあるので、(その桜は、)ほかの家の花と
 は思えないものだなあ。

我が君のことだけを祈って、賀茂の白波が寄
 せては返すように、私も皆と一緒に賀茂の社
 から立ち返るとしよう。

